

地球汚染の自覚を

福島第一原発の放射能汚染水問題がにわかにクローズアップされている。しかし、この問題は事故直後から継続中であり、最近新たに起こったことではない。事故前から原発の敷地地下には毎日約 1000 トンの地下水が流入しており、そのうち 400 トンが事故を起こした原発建屋に毎日流入している。さらに今も炉心を冷やすために毎日 400 トンの冷却水が注入され、これがもれ出て地下水を汚染しているのである。東電はこの汚染水をくみ上げて半分は冷却用に再利用し、残りは地上のタンクに貯蔵しているが、敷地がタンクで一杯になり、限界は近い。高レベル廃棄物処分問題も含めて、地下水は日本の原発のアキレス腱である。

なぜ地下水が流入？

事故を起こした福島第一原発（以下、F1）に何故地下水が流入しているのか。理由は簡単。F1 は山を削り川の流れを変えて整地した場所に作られたため、そもそも山からの地下水が原発の下を通過して海につながっている。そのため敷地の地下水位は潮の満ち引きに伴う潮位と連動して変化しているらしい。東電は地盤が地下水で軟弱になるのを防ぐため、事故前から毎日 850 トンの地下水をくみ上げ海に捨てていたようだ。原発の立地については地震との関連でもっぱら活断層が問題にされるが、F1 はそもそも地下水位の高い軟弱地盤上に建てられたものだった。もし、炉心のメルトダウンとメルトスルーが起こらなければ、こうした問題は表に出なかったかもしれない。水の豊かな日本に原発を作る危険性の新たな問題である。東電は汚染した地下水をくみ上げ、1000 トン入るタンクに貯蔵していたが、急場しのぎのために作られたタンクはゴムパッキングをはさんだ金属板をボルトで締めただけのもので何も無くても寿命は 5 年である。震災後頻発する余震などで継ぎ目が壊れるなどの事故は自明である。さらに、こうしたタンク群は原発の下を流れる地下水の上流側（山側）に作られたため、壊れたタンクからの汚染水が地下水に流入したのが最近の事故である。

ロンドン条約違反

世界で核兵器や原発が開発された 1940 年代当時から放射性廃棄物は悩みの種であった。再処理施設や研究所などの放射性廃棄物はドラム缶に詰められ大量に海洋投棄さ

れ世界の海を汚染した。その他工業化に伴って大量に出る産業廃棄物なども海を汚染したため、国連では 1975 年に「ロンドン条約」を作り、世界的な規制を始めた。日本もかつては放射性廃棄物を海に捨てたが、1980 年にロンドン条約に加盟・批准した。放射性廃棄物については、1993 年に低レベル、高レベルとも海洋投棄は全面禁止された。それまでに世界中で海に捨てられた放射能の総量は 85×10^{15} (15 乗) Bq である。さて、F1 からこれまで海に流された放射能の量は、 $50 \sim 60 \times 10^{15}$ (15 乗) Bq と見られている。これが IAEA が汚染水事故を原発自体の事故と切り離し、レベル 3 と認定した根拠である。即ち、F1 から海に流れた放射能は、世界中の国々が過去に海に投棄した量に迫っているのである。これは明らかにロンドン条約違反である。もっとも、東電や政府は「意図的に流したわけではない」とか「船からドラム缶で捨てたわけではない」などと言い訳をしているようだが。チェルノブイリ原発事故の収束に当たったベラルーシの責任者は F1 の汚染水問題を「明らかな犯罪だ」と糾弾している。F1 は地球汚染をもたらしている、という自覚が我々日本人には必要である。

高レベル廃棄物処分は危険

事故が無くてもいずれ放射能と地下水の問題は噴出するはずだった。いたるところで地下水が湧き出る日本で、10 万年間安全に高レベル廃棄物を地層処分出来る場所などない。F1 事故はこの問題を一足早く見せてくれたに過ぎないのである。（河田）